

## ハイデルベルク信仰問答講説教52「すべてを赦されて」(2012年9月30日 礼拝説教)

## 【聖書箇所】

神よ、わたしを憐れんでください/御慈悲をもって。深い御憐れみをもって/背きの罪をぬぐってください。わたしの咎をことごとく洗い/罪から清めてください。あなたに背いたことをわたしは知っています。わたしの罪は常にわたしの前に置かれています。あなたに、あなたのみにはわたしは罪を犯し/御目に悪事と見られることをしました。あなたの言われることは正しく/あなたの裁きに誤りはありません。(詩編51:3-6)

わたしたちの負い目を赦してください、/わたしたちも自分に負い目のある人を/赦しましたように。わたしたちを誘惑に遭わせず、/悪い者から救ってください。』もし人の過ちを赦すなら、あなたがたの天の父もあなたがたの過ちをお赦しになる。しかし、もし人を赦さないなら、あなたがたの父もあなたがたの過ちをお赦しにならない。』(マタイ6:12-15)

## 【説教】

本日は、第51主日、問126のところ聞いてまいりましょう。ここは主の祈りの五番目の祈り「われらに罪をおかす者をわれらがゆるすごとく、われらの罪をもゆるしたまえ」のところについて教えています。ここでの主題は言うまでもなく「罪の赦し」であります。この罪の赦しが、わたしたちの信仰の中心であることは明確であります。福音書において、主イエスは「あなたの罪は赦される」と言われ、そして「人の子が地上で罪を赦す権威を持っていることを知らせよう」(マタイ9:6)と言われます。またよみがえりの主は、弟子たちに息を吹きかけ「聖霊を受けなさい。だれの罪でも、あなたがたが赦せばその罪は赦される。だれの罪でも、あなたがたが赦さなければ、赦されないまま残る」(ヨハネ20:22)と言われます。それゆえ教会は、使徒信条の第三項「我は聖霊を信ず」の中で「罪の赦し」を信じると告白します。それが教会の信仰であります。

そしてこの罪の赦しは、他でもなくイエス・キリストにおいて現された神さまの赦しの恵みであります。キリスト教の教理の言葉で言えば、それが「贖罪」であります。具体的には、キリストの十字架と復活によってもたらされた神さまとわたしたちの和解のことです。それが教会で語られる福音となります。毎週の説教で語られることもそれに尽きると申し上げてよいでしょう。長老会で洗礼試問をする時にわたくしが必ず読む聖書の箇所があります。Ⅱコリント5:19以下を読みます。「神の義」というのは、神さまに罪を赦していただいて、正しいとされたことです。そのために罪と何の関わりもないキリストが罪とされ十字架に付けられました。教会は二千年の歴史を貫いて、このことだけを福音として語り続けてきました。「人は皆、罪を犯して神の栄光を受けられなくなっていますが、ただキリスト・イエスによるあがないの業を通して、神の恵みにより無償で義とされるのです」(ローマ3:23-24)そこにわたしたちの喜びがあります。

しかし、このように繰り返し「赦し」の御言葉聞き、これを確かめながら信仰生活を続けているにもかかわらず、わたしたちはどうもこの赦しが分からない。自分が赦されている実感が無い。どこか他人事になっているところがあります。またわたしたちの生活を振り返りますと、人を赦せない思いでいっぱいになることがある。あらゆる人間関係においてそれは深刻であります。どうして赦しの御言葉を聞いているのに、赦しに生きられないのか。それは罪の自覚が弱いからではないでしょうか。罪を自分の問題として捉えようとしません。それは自分以外の人間のことで、それではいくら教会が罪の赦しを説いたところで、その心に感謝、喜びは湧いてきません。神さまの救い、赦しの恵みを知るためには、何よりわたしたちが罪を持っていることを知らなければなりません。

ハイデルベルク信仰問答は、まずその罪の自覚をここに促しています。今日のところを読みましよう。まず問126の前半を読みます。「みじめな罪人」とあります。この信仰問答では、

初めからわたしたち人間をそのように考えています。思い起こしていただきたい。信仰問答の第一部は「人間の悲惨さ」でありました(問5、問8)。まずはそこに立たなければなりません。そこに立たないと話は始まりません。この後、第二部のキリストによる罪からの救いに入れないのであります。

しかしこの悔めさがなかなか分からないのであります。教会で罪の話聞いてもあまりそこに危機感が生まれません。そもそもそこから考え直していかなければなりません。罪は単に自分一人の問題、心の中の問題ではなく、常に他者との関わりの中で起こるものです。それは神さまであり隣人であります。観念的なものではない。マタイ福音書の主の祈りでは「わたしたちの負い目を赦してください」とあります。「負い目」とは「負債」「借金」のことです。負債を負っている者は、それを誰かに対して返済する義務、責任があります。では罪の問題は、誰に対してその責任を負っているのか。

今日は詩編51編を読みました。ちなみにわたしたちの教会では、この詩編に加え32編、130編を礼拝の中で繰り返し交読をしています。それは罪の悔い改めとして大切な礼拝の要素になります。ここを通らなければ、この後の福音の説教が生きてきません。今、長老会で礼拝の式順の検討をしていますが、礼拝というのは、その全体の流れが重要です。プログラム一つ一つに意味があり、それが最後まで通して初めて完成されるものになります。ですから遅刻して途中で入るようなことはいけません。説教だけ聞けばよいということでもない。招きのところから、最後の祝福まで、余計な部分は何一つないのであります。

この詩編51編で「あなたに、あなたのみにはわたしは罪を犯し、御目に悪事と見られることをしました」(51:6)とあります。この詩はダビデの詩と言われます。この詩編の見出しにはこうあります。「ダビデがバト・シェバと通じたので預言者ナタンがダビデのもとに来たとき」この話はサムエル記下11-12章にありますからぜひ読んでください。ダビデはウリヤという自分の部下の妻バト・シェバを自分のものにするためにウリヤを戦場の最前線に送り出し、殺してしまいます。そしてその妻を奪うのです。非常に具体的です。そういう話が聖書に出てくる。

今日の問答でも「わたしたちのあらゆる過失、さらに今なおわたしたちに付いてまわる悪」とあります。「過失」というのは故意ではなく間違っしてしてしまうこと。でもその後に「付いてまわる悪」とあります。それは過失ではなく、むしろ故意に犯してしまう罪です。故意でないものも、確信犯的なものも含めて、そういうすべての罪が付いてまわるのです。それはしつこくつきまとう。こびりつくという意味です。あのダビデの犯した罪がわたしたちにもこびりついている。いくら落とそうとしても簡単に落ちないのです。それが地上を生きるわたしたちの罪の現実です。まだ完成を待たない状態。

そのこびりついてしまった罪の原因は何か。預言者ナタンが

ダビデのところに来てそのダビデの罪を告発した時にダビデは言います。「わたしは主に罪を犯した」(サム下12:13) それは主に対して罪を犯しているということです。この罪は単にダビデ個人の罪ではない。相手があります。もちろん見える形においてはウリヤやバト・シェバもそうでしょう。でもそれだけではないのです。

ダビデは「主に対して罪を犯した」と言います。それは罪の問題が神さまと人間との問題であることを明らかにしています。単に人間同士のことではない。もっと深いところで、神さまに造られた人間として、その御心に背いていることが問題なのです。そこに立たなければ罪の救いは分かりません。表面的に見えるところだけで罪を考えるならば、この世の法律がそれを裁けばよいということになります。でも人間の罪はもっと深い部分にあります。そこから新しくされない限り、わたしたちはまた同じことを繰り返すだけなのです。

なぜこの世に教会が必要なのか。教会はこの根源的な罪の問題にしています。ただ社会のことを良くすればよいということではない。それは政治の問題。もっと根本的なことを教会は扱う。それが罪の問題。人間がこの罪から救われなければこの社会は変わらないのです。政治家は「変革」掲げる。しかし真の変革は人間の罪からの救いです。この社会を構成する人間を新しくすること。神さまに造られた本来の祝福された人間を取り戻すこと、それが教会の使命です。

ナタンは言います。「その主があなたの罪を取り除かれる」と。それは自分一人で解決できるものではない。わたしたちが負債を負っているのは、神さまに対してであります。その神さまが赦してくださらなければ、その罪は決して解決されないのがあります。同じ詩編49編に「神に対して、人は兄弟をもあがなえない。神に身代金を払うことはできない。魂をあがなう値は高く、とこしえに払い終えることはない」(49:8-9)とあります。人間がこの負債を払うことはできない。わたしたちは神さまに対して完全に返済能力がないということです。

では、どうしたらよいか。だからこそ、わたしたちにイエス・キリストが与えられたのです。その命がささげられたのです。「わたしたちはこの御子において、その血によってあがなわれ、罪を赦されました。これは神の豊かな恵みによるものです」(エフェソ1:7) わたしたちには全く返済能力がないのに、ただ神さまの恵みによってわたしたちは赦され、すべてを免除、帳消しにされました。わたしたちはこの恵みの赦しによって、再び立ち直ることができるのです。もし人間がやり直せるとしたら、それは自分の力ではなく、この自分を赦してくださったお方によって、神さまの恵みによってのみ、わたしたちは人生をやり直すことができます。新しく歩き出すのです。

さて、このわたしたちの再出発について、信仰問答は次に言葉を重ねています。後半部分を読みます。この神さまの赦しを経験したものは、ただ良かったね、めでたしめでたしということにはなりません。そこには赦された者としての責任が生じます。例えば、ある出来事を知り、経験した者だけが、そのことを伝え、それに生きることができる。経験しないとできない。神さまの愛を経験した者は、その愛に生きることへも遣わされているのです。

では「われらに罪をおかす者をわれらが赦すごとく」とはどういうことなのでしょう。主の祈りのこの部分はいつも問題になります。「罪を赦してください。わたしたちも赦しますから」特にマタイの6:14は「もし人の過ちを赦すなら、あなたがたの天の父もあなたがたの過ちをお赦しになる」とあります。人を赦すことが、神さまに赦される条件のように思われてしまう。しかし、御言葉はそういうことを教えているのではありません。ここで注意したいことは、わたしたちの赦しと神さまの赦しがつながっていることです。わたしたちが赦せば神さまも赦し、わたしたちが赦さないなら神さまも赦さない。つまりわたしたちの赦しはわたしたち単独の業ではない。神さまの赦しに基づくものであることがここに示されています。

わたしたちはキリストを通して神さまに赦されている。だからわたしたちも赦すことができる。いやもう赦している。わたしたちの中に生きて働かれるキリストがすでに赦している。だからわたしたちももう赦す準備ができています。信仰問答で「あなたの恵みの証しをわたしたちの内に見出し、わたしたちの隣人を心から赦そうとたく決心しています」とあります。この決心はわたし一人のものではない。キリストの決心です。神さまの決心です。洗礼を受け、キリストと結ばれた者は、皆、その決心を持っている。そういう新しい命が始まっているのです。

以前、この主の祈りは、キリストと一つになって祈る祈りだと申しました。赦しもそれはキリストの赦しが土台にあるのです。「生きているのは、もはやわたしではありません。キリストがわたしの内に生きておられるのです」(ガラテヤ2:20) わたしの中でキリストがすべてに先んじて赦しておられます。その赦しに支えられ、引っ張られてわたしたちも赦すのです。その準備はもう出来ている。だから赦しに生きることをあきらめずに今週も歩んでまいりましょう。お祈りをいたします。